

多々羅通信

——同志社国際高等学校の一学期——

山本通夫

Kさん、お便りありがとうございました。いろいろとご配慮いただき、感謝いたしております。

さて、四月一日の開校入学式が始まったわたしたち同志社国際高等学校の歩みは、いま、すこぶる順調です。

豊かな自然と、じゅうぶんに備えられた、すばらしい教育施設、条件のなかで、それは一歩一歩、確実に前進しています。わたしたちの、この歩みにたえずご配慮くださり、祈ってくださるあなたに、このことをまず、喜びと感謝とをもってご報告させていただきます。

ところで、あなたがいつも気にかけてくださる生徒数のことですが、それも七月末日現在で、表1のようになりました。他の男女共学校と比べてみますと、女生徒の数がや

| | | | | | |
|------------|----------|----|----|----|-----|
| 帰国生徒 | | 女 | 男 | | |
| | 現地校(F) | 8 | 17 | 25 | |
| | 日本人学校(J) | 15 | 27 | 42 | 67 |
| 一般生徒国内校(G) | | 38 | 28 | | 66 |
| | | | | | 133 |

表 1

| | | | |
|---------|----|--------|-----|
| アメリカ | 18 | インドネシア | 1 |
| ベネズエラ | 1 | イギリス | 5 |
| ブラジル | 3 | 西ドイツ | 4 |
| アルゼンチン | 2 | フランス | 3 |
| オーストラリア | 1 | ベルギー | 1 |
| シンガポール | 11 | デンマーク | 1 |
| タイ | 3 | ギリシヤ | 1 |
| 韓国 | 2 | アルジェリア | 2 |
| ホンコン | 2 | 南アフリカ | 1 |
| タイワン | 3 | 20ヶ国 | 67名 |
| フィリピン | 2 | | |

表 2

や多めで、男女の比率がほぼ1対1、「女生徒がちょっと多いなあ……」といった感じですが。学校生活全体が、色どりも美しく、華やかな雰囲気にも包まれているのも、楽しいものです。

海外から帰国してきた生徒たち——帰国生徒たち——の実態は、

表2です。アメリカからの生徒がやはり多いのです。そして、シンガポールからの二名、イギリスからの五名がそれにつづきます。あちらでは、日本人学校や現地校で勉強してきた生徒たちです。

九月の新学期から、表3のように帰国生徒の編入が予定されていますが、なんとかして、一年、二〇〇名の定員数を確保したいものです。

生徒の学力、とくに、帰国生徒たちの学力について、おたずねくださる方が多くいらっしやるのですが——あなたもそうでしたかね——かれらは、あちらでそれぞれきちんと勉強してきていますし、国内生徒たちとの新しい生活のなかでも、うまく適応できています。かれらは、少しずつですが、高校生としての力を伸ばしていていますし、心配はありません。

先日、五月中旬に全国一斉に行われたA社の「高一実力テスト」の成績一覧が、答案とともに送られてきました。このテストは、生徒たちの中学校での三ヶ年間の学力——国語、数学、英語の三教科——を診断するためのもので、受験したのは、希望者だけの一四名という少数でしたが、かれらの成績を全国の全受験生、一〇九五〇六名の成績に対比させながら評価してみますと、表4と表5のようになります。同志社国際高等学校の生徒たちの学力、そのなかでの帰国生徒たちの学力がどの程度のものであるかが、これでおおよそご理解いただけると思います。

このような生徒たちを、国語、数学、英語の三教科では、それぞれ、生徒たちの学力に応じた習熟度別クラス編成で学習をすすめて

| | | | |
|-----------|---|---|----|
| | 女 | 男 | |
| 現 地 校 (F) | 7 | 5 | |
| 日本人学校 (J) | 3 | 1 | 16 |

表 3

| | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 受験生の種類 | G | G | G | G | J | G | J | G | G | G | G | J | G | J |
| 総合点平均 | 85.3 | 80.7 | 80.7 | 79.3 | 72.3 | 70.3 | 67.0 | 66.7 | 65.0 | 63.7 | 60.7 | 60.0 | 57.7 | 47.0 |

表 4

| | 受験者数 | 1科目得点 | | 1科目得点平均 | 科目別平均点 | | |
|---------|---------|-------|------|---------|--------|------|------|
| | | 最高 | 最低 | 総合 | 国語 | 数学 | 英語 |
| 全 国 | 109,506 | 99.0 | 0.0 | 47.1 | 38.3 | 56.3 | 46.9 |
| 京 都 府 | 3,365 | 98.3 | 8.3 | 49.5 | 38.6 | 58.7 | 51.1 |
| 同志社国際高校 | 14 | 85.3 | 47.0 | 68.3 | 50.4 | 76.9 | 77.6 |

表 5

| | | 学習教材 |
|-----|-----|---|
| I | A先生 | 〔1学期前半〕 |
| | B先生 | 鈴木孝夫「国語の尊重」 |
| | C先生 | 芥川龍之介「羅生門」 |
| II | A先生 | 〔1学期後半〕 |
| | B先生 | 矢内原伊作「自己について」 旺文社版現代国語「近代短歌抄」 |
| 象 組 | D先生 | 漢字とかな・教育漢字と当用漢字について 谷川俊太郎「思いつめる」 矢内原伊作「自己について」 木俣 修「短歌について」 |

表 6

国語科の「現代国語」では、表6のようなクラス編成をとっています。習熟度に応じて分けられたクラスですが、IとIIの間にはあまり差はなく、これらのクラスはともに、いわゆる「普通のクラス」なので、そこでは、日本国内のどの高等学校でもみられる、

ごくあたりまえの国語科学習が行われています。

「象組」——担当の先生のニックネームから、そのように呼ばれているこのクラスの生徒たちはみな、日本語で聞き、話すことにはなにごとに不自由がないのですが、読み・書き、つまり、漢字の読み・書きに困ってしまうひとたちなのです。漢字の読み・書きの学習に重点をおき、それをじゅうぶんに指導し、その上で、とにかく、「国語科学習」をゆっくり、確実にやってゆくという在り方で、このクラ

| | | 一般生徒 (G) | 現地校 (F) | 日本人学校 (J) | |
|----|-----|-------------|------------|--------------|----|
| I | A先生 | 1学期前半 | 15 | 1 | 5 |
| | | 1学期後半 | 17 | 2 | 5 |
| | B先生 | 前半 | 13 | 4 | 8 |
| | | 後半 | 11 | 5 | 9 |
| | C先生 | 前半 | 12 | 1 | 9 |
| | | 後半 | 12 | 3 | 10 |
| II | A先生 | 前半 | 13 | 2 | 8 |
| | | 後半 | 13 | 3 | 9 |
| | B先生 | 前半 | 15 | 1 | 4 |
| | | 後半 | 15 | 2 | 5 |
| 象組 | D先生 | 前半 | 0 | 16 | 6 |
| | | 後半 | 0 | 10 | 2 |

表 7

スの学習指導がすすめられています。

表7をご覧くだされば、国語科のこうした工夫と努力とが、少しずつ実を結んでいっているのがおわかりいただけるでしょう。

数学科や英語科のことは、また後日、ご報告させていただきます。

さて、全校生徒のうち、男女あわせて七二名の生徒たちが、寮生活をしていきます。表8は、七月末日現在の寮生たちの実態です。男子寮は「洗心寮」、女子寮を「清心寮」と呼びます。ともに、上野総長の命名です。

寮生活は、寮務主任の先生、寮監夫妻、寮母さんたちによって管理指導されていますが、生徒たちは、「寮生会」を組織して、自治活動も盛んです。帰国生徒と国内生徒とが一つ屋根の下で、励ましあい、助けあって生活してゆく、その寮生活のなかで、将来、国際社会で活躍できる人間となるための土台を、かれらひとりひとり築いてゆくことでしょう。

生徒会の役員が選出され、生徒会活動もはじまりました。クラブや同好会の活動は活発です。表9をご覧ください。

運動クラブでは、サッカー部、バスケットボール部、硬式テニス部などの活動が目立ちます。高体連主催の大会や、その他の選手権大会、対抗試合に、結果を気にせず、どしどし参加、出場しています。

| | 女 | 男 | |
|----------------|----|----|----|
| 現地校(F) | 4 | 15 | 19 |
| 日本人学校(J) | 8 | 23 | 31 |
| 一般生徒 国内校(G) | 10 | 12 | 22 |
| | 22 | 50 | 72 |

表 8

| クラブ名 | 女 男 | | 同好会名 | 女 男 | | 同好会名 | 女 男 | |
|---------|-----|----|---------|-----|---|-----------|-----|----|
| | 女 | 男 | | 女 | 男 | | 女 | 男 |
| 硬式テニス | 15 | 12 | 硬式野球 | 0 | 9 | 農 業 | 0 | 2 |
| サッカー | 0 | 14 | バレーボール | 3 | 4 | 旅行友の会 | 2 | 0 |
| バスケット | 5 | 9 | バドミントン | 7 | 0 | 旅 送 | 0 | 3 |
| 卓 球 | 4 | 7 | ラ グ ビ ー | 0 | 6 | 合 唱 ク ラ ブ | 2 | 3 |
| 剣 道 | 4 | 6 | 軟式テニス | 3 | 0 | | | |
| サービスクラブ | 10 | 5 | 生 物 | 3 | 3 | クラブ所属 | 47 | 58 |
| バイリンガル | 9 | 5 | 演 劇 | 7 | 0 | 同好会所属 | 27 | 30 |

表 9

硬式野球部も結成されましたが、活動は九月からはじまります。

文化・学芸クラブのうち、サービス・クラブでは、「難民」問題と真正面からとりくみ、難民救援のための募金運動に熱心です。バイリンガル・クラブは、帰国生徒たちが、全校生徒や先生方に、自分自身がこれまで在任してきた国々の自然風土、歴史、文化などを理解してもらおうという目的で活動するクラブです。この間、ブラジルで生まれ、在任一九ケ年間というK君が、お手製のブラジル菓子を配りながら、「ブラジル紹介」をしてくれました。それ

六月には、球技大会を持ちました。各クラス別の、ソフトボール、テニス、卓球の試合で、一日を楽しく過しました。秋には、体育祭や文化祭などの行事を行います。生徒たちが、どんなものを創り出していつてくれるのか、いまからのしみです。二年生終りの三月に、修学旅行をしようという計画が、すすめられています。国際高等学校らしく、海外へ出てゆくこととなるでしょう。

図のようなバッヂが制定されました。九月の新学期から、生徒たちは、このバッヂを同志社国際高等学校の徽章として着用します。三〇数点あった生徒たちの応募作品のなかから、小林志摩さん、樋口恭子さん、井上弓子さんの三人から出されたデザインを基にして創り出されたものが選ばれたのです。選考と決定には、生徒会の生活委員会のメンバーが当りました。生徒たちの手によって、生徒たち自身のバッヂが制定されたのです。

ともあれ、同志社国際高等学校の歴史は、いま始まったばかりです。学校設立の目的に適った、「同志社の学校」としての高等学校へと成長してゆかなければなりません。よろしくご指導、ご鞭撻ください。わたしたちのためにお祈りください。

(国際高等学校教諭・国語)

は楽しいひとときでした。春の遠足は、校祖、新島襄先生の墓参と大文字山への縦走ということで、五月二日に行いました。生徒たちには、この日のことが、同志社国際高等学校最初の「校祖墓参」として、いつまでも忘れないことでしょう。



同志社国際高等学校での生活

杉 岡 恵

〈大意〉

人生は不可思議で予測し難いものです。ニューヨークで十一年間快適に暮っていた私は、日本へ一人で帰国するなど夢にも思いませんでしたのに、昨夏、突然、両親から日本で勉強するように言われたのですから……。入試まで僅か数ヶ月。両親の決定に反対して話し合うだけの時間もなく、自分が今一体どんな状況にあるのか考える余裕さえなく、私は目前に迫った帰国と受験の準備に忙殺されたのです。

入試の際、帰国生徒はめぐまれていて、作文と面接だけでしたから、やさしかったのですが、それでも私は落ち着かず、合格者の名前が発表されるまでずっと不安でした。合格と分ってからも、日本の学校でやって行けるかしら、友達は出来るかしら、とあれこれ考え続けました。けれど、入学第一日に、二人の新しい友達が出来て、しかも、そのうちの一人は、友達になるチャンスはあるまいと思っていた一般生で、私の不安はいっぺんに解消したのです。入学式では、私と同じように気持ちをとかぶらせた多くの生徒、両親、先生方がテレビカメラのライトに照らされていました。学校も学寮も新しく、そのため壁が湿っぽく、塗料の匂いがしますが、新しい建物特有のさわやかな雰囲気があり、この地方では際立っています。

本校を、日本の普通の高校と比べると、帰国生徒を受け入れている事を除いては、たいした違いはありません。そのことを、帰国生徒は有難く思っています。というのは、日本流の勉強のやり方を学び、且つ、それを従来のやり方と比較検討したいからです。本校をニューヨークの学校と比べるなら、授業のやり方が全く違いますし、先生と生徒の相互関係もどこか違う感じですが、本校が、私が今迄に聞いた他の日本の学校と特に違う点は、先生方の生徒への接し方にあると思います。授業中、帰国生徒が理解しにくい言葉は、先生が英語に訳して下さいますし、解らないところは、その生徒が納得するまで、ていねいに説明して下さいます。本当に助かります。又、英語、数学、国語は習熟度別のクラスで勉強しております。そのクラス分けは、テストと面接によって、生徒の今迄の学習分野やこれからやりたいことを調べたのちに行われました。

総合的に見て、日本での生活は、予想していた程悪いものではありません。ひとりの人間として、また高校生として、私はいつになったら日本人の暮らに完全にとけ込むことが出来るのか、それは勿論、時が経てば分ることです。こんな風にして、私はニューヨークから「祖国」という土地へ突然やって来て、不可思議な人生に身を任せているわけなのです。

(邦訳：国際高等学校英語科主任 佐々木尚子)

and flash bulbs shining in our eyes, we promptly became students of Doshisha International High School.

The school itself has the new feeling every new building has, complete with the damp walls and the smell of the freshly painted building. The modern styled building has attracted attention around the area and sometimes curious neighbors come and peek in the school and also the dormitory.

But the activity of the school is not much different from any regular school in Japan other than accepting students from abroad. At this particular moment, there are no special activities planned to make this difference. But this is not to be taken in the negative way of thinking for many returnees are thankful for this way of learning. To us it gives us a chance to experience the Japanese way of learning and compare it with the system which we were used to.

I for one, find schools in Japan to be more active in the area of sports. And also the attitude toward student toward teacher, and teacher toward student is somewhat different. I remember hearing from my seventh grade teacher in New York that we were too childish for our age and that we had to become more mature. And this was said to us when we were thirteen years old. So as you can see the way the classes are held in its entirety is quite different between Japan and New York.

I find the real difference in this school as compared to other Japanese schools of which I have heard about is the attitude of the teachers. Lessons not understood can be explained by the teacher in detail until understood by the student. And most of the time, the teachers, trying to make themselves understood would translate any hard to understand words into English. This has been very helpful for me in comprehending any subject.

Classes like Mathematics, English, and Japanese are divided according to level of knowledge, and the area of work which the student would like to study toward. The classes were divided after tests were given to see which level the students were at, and after interviews with the teachers of the particular subject.

All in all life in Japan is not as bad as I thought it would be. Of course time is the only thing that will tell when I will be able to fully adjust to the Japanese way of life in both personal and school life. But this will be left up to life which is so strange, putting me all of a sudden from New York, to a place called "home".

杉 岡 恵 の 横 顔

1963年大阪生れの女生徒5歳で渡米し、NYで幼稚園4か月、小学校6年間、中学校2年間の勉学の後、ジョンバウン高校に進学。帰国後のことを考え3か月後にニューヨーク日本学校に転じ、中学一年に入学、80年3月卒業、本校一年に入学。温和で努力家、日本語もめざましく上達している。他人への思いやり、強い責任感でクラスの信頼厚く、頼りになるお姉様の存在。

Life at Doshisha International High School

By Kay Sugioka

Life is strange in that one can never quite predict what will happen in the future. A person can be in one place one minute and find himself in a totally different place the next without completely realizing what was happening.

This has been my case. I had, for eleven years, lived comfortably in the United States (New York) and the thought of returning to Japan was only a dream. But suddenly last summer, I found myself seated in front of my parents discussing my future. This led to the inevitable conclusion of sending me back to Japan. And the months that followed kept me so busy with preparations that it allowed no free time to protest what had been decided.

I cannot fully remember what the feeling was when I stepped off the plane, but when I saw my friend who I had not seen in five years standing next to all my aunts and uncles, memories flowed back with the tears.

The days that followed were spent in total confusion and not quite knowing where I stood in life. I do not really remember what I did for the next few days until the days of the entrance examination.

The examination was, I must admit, quite easy. Of course being a returnee had its advantages when taking the test, and people like myself who had lived abroad for a certain amount of years only had to write a composition and have an interview with some of the teachers. But like the nervousness and anxiety that follows with taking any examination, this feeling kept me quite busy for days on end until the names of the accepted students were announced.

After learning of my acceptance into this high school, I was kept busy with the imaginations of school life in Japan. Peaceful dreams of school life turned into nightmares of not being able to keep up with school work, and the chance of friendship looked impossible.

But on the contrary, I had nothing to fear. For on the first day of school, in between all the confusion, I made two new friends, one of them being a student who had never lived abroad, a friend which I thought was impossible to make.

The first day of school was filled with nervous students and parents, and equally nervous teachers. And with the lights from the T.V. cameras

帰国子女の父兄の立場から

岩崎健三

一九七四年五月、アメリカへ出向の社命を受けました。最初は、三カ月程度との事であつたので一寸とした出張程度と受け止め、家族の事は考えずに出発しました。ところが八月頃に、今しばらく出向を継続してほしいとの事となり、急に家族呼び寄せの段取りをしなくてはならなくなりました。十二月末に一時帰国をして、家族や子供達のアメリカでの学校生活について打ち合わせを開始しました。長女は中学二年、次女は小学六年、長男は、三歳。当然問題になつたのは上三人の学校問題でした。二人の娘達は最初は、アメリカ行をいやがりましたが、私は、こんな良い機会は希望してもなかなか訪れないこと、育ち盛りの子供達にとって外国で生活する事が良い経験となり、又どんなに有意義な体験を得ることが出来るかを確信を持って説明し、理解させて、全員を連れて行く事に決定しました。決めた以上は、今度は学校をどうするのか、ニューヨークといえども私どもの住んでいる所は田舎で、マンハッタンより約百キロメートル以上も北の方で、到底日本語学校に入る事も出来ないの

で、現地の公立か私立の学校のいずれかに入学させねばならない。現地の色々な人に学校状況を聞き、女の子であるので私立学校に入る事に決めました。入学をお願いするため、恐る恐る学校へ挨拶に行くと、驚いた事には校長先生は、私どもをにこやかに迎え入れ「外国の子女を受け入れる事は学校にとって、大変名誉な事です。」と言いながら気持ち良く入学を引き受けてくれました。子供が学校に入ってから、学校側は言葉の不自由な事について特別に授業を計画したり、特別に上級生のアシスタントを添けて、それはそれは大変な気の使いようでした。

本当にいつでも来て下さいと待ち受けている学校の態度には、大変に感心しました。お陰で長女はハイスクールを卒業し、次女はエレメンタリースクールを八年生で卒業出来、続いてハイスクール一年生を終了する事が出来ました。そんな時に突然帰国する事になりました。最初は、八年程度は滞米生活をする予定で、長女は大学卒業、次女もハイスクールを卒業出来る程度の心積りでいたために、

突然の帰国にややあわてました。現地では日本語新聞や内地よりの新聞で海外帰国子女の学校問題が種々論議されている事は承知しておりましたが、子供達は楽しく学校生活を送っている事は承知して、実のところ帰国してからの学校問題など気にもしていなかった。帰国するわが子をどんな学校に入れたら良いか、又、すんなり入学させてくれるだろうか、等、いざ帰るとなると我然心配事が出て来ました。そんな頃に現地日本語新聞や、日本から送られてくる新聞で、同志社国際高等学校が一九八〇年四月開校を目ざして準備が進められている事を知りました。次女は、絶対にこの学校だと秘かに決めました。しかし外国での事でどうする事も出来ず、帰国の日を待ちました。その間、娘二人はアメリカに残って学校生活を終了させたいと言出し、親として二人を残して帰国する事も出来ず、又もやアメリカに来る時と同様に言い聞かせて一緒に帰国する決心をつけさせたものです。先輩の子女が先年帰国された時は、学校の入学試験のため親よりも先に帰国され、やっとの思いで私立高校に入学されたとの事も聞いておりました。私どもは十月に、学校問題を気にしながら一家無事に帰国しました。

長女に関しては、帰国して間もなく某芸術大学の入試説明会があり、それに出席して聞いた所では「帰国子女でもハイスクールの卒業証明があれば入学を受け付ける。」との事を聞き一応の安心、次女の方は、同志社国際高等学校の申し込み説明書もまだ出来ていない情況で、どうなる事かと心配しました。

次女は、中学時代を全部アメリカで過ごした為に、日本語には自信がなく、基礎が出来ていない為、学区内の中学校に途中入学を聞

いてみましたが「年齢が義務教育以上の年齢なので受けられない。」と断られ、又私立の高等学校や公立高校への編入学を申し入れても「アメリカの学校と、日本の学校では、カリキュラムが異なるため受け入れる事は出来ない」との事でした。国が異なるので何もかもちがうのは当然であるのに日本の教育者、文部省はいったい何を考え、又なんとせまい物の考え方をしているのかと思いました。

滞米中によく新聞で見たり、商社勤務の方の奥さんに聞いた帰国子女の問題、苦勞話、子供と別れて住む話、日本の社会に出るには日本の教育を受けないと出世しない等の話が、我家の現実として振りかかって来た事をひしひしと感じました。

日本の社会及び教育制度のこの鎖国的な考え方、心の豊かさのない自分達の学校の事だけしか考えないせまい制度全くあきれたものです。毎年学校関係者が海外の学校教育視察に出かけられるが、何を見たり、感じたりして帰られるのか、一週間や二週間では単なる旅行者として見て帰る所に問題がある。

自分達の学校制度が、一番良いと頭から思い込んだうぬぼれた頭の硬い人が、何人欧米の学校教育を見ても何ら日本の教育制度が良くなる足しにはなりはしない。

欧米の学校制度を二年、三年がかりで家族同伴でじっくり視察されるのが一番良いと思います。無理でも最低一カ年は必要です。

こんな思いを毎日思い続け、又親のために子供の教育を犠牲にしてはならないとの親の責任はどうあるべきかを考える毎日でした。

そんな時、会社の上司の紹介で、同志社国際高校の願書を手しました。

その設立の趣意、帰国子女を優先的に、一般生徒との交流による教育は、全く私どもの為に開設して下さるのかと思われる程有難く思いました。

直ちに願書に記入し、学校を訪れました。まず、驚いた事は静かな丘陵に建築中の真新しい校舎、訪れる途々、この学校にわが子が三年間お願いする事が出来れば、こんな幸せな事はないと、話しながら仮事務所前に到着しますと、そこには和やかなお二人の先生が寒い二月の風に吹かれながら屋外に待ち受けて下さり、全く恐縮した次第です。そのお二人が校長先生と事務長さんと聞いて二度びっくりでした。丁度、アメリカで入学手続きに行つた時のハイスクールの校長先生と同様な態度で、全く気持ちの良い、帰国子女を心から待っていますと、言つた態度で迎えられました。全く喜しく、これならアメリカ式の教育がしていただける学校ではないかと、その時既に思いました。校長先生に色々和学校の運営や教育方法を聞く程に、自分の子供を預けるのはこの学校しかないと思ひました。今まで色々な学校で言われた事が、うその様な思ひがしました。同じ日本でも全く異なつた二つの考え方で運営されている学校制度があるのを知りました。さすがは私学の第一人者の同志社だと思ひました。娘は幸わせにも入学を許され、心の広いゆとりのある先生方から、ほとんどアメリカで受けたと同様な、伸び伸びした学校生活を元気で送らせてもらっています。国語については、能力に応じたクラス編成の授業と聞き、全く有難い事です。

先日も娘が「今日は、編入学テストの為に学校が休みだ」と言います。話を聞くと、海外の学校からの編入学テストがあるため

です。この様に日本の制度にとらわれず門戸を広く開いて下さることは、私も海外で生活し同じ悩みを持った者にとって、全く心強い限りです。幸にして、わが子の場合は、帰国後約六カ月間家にいた後、同志社国際高校に入学出来た大変ラッキーな例ではありますが、これから海外に出られる家族の方々や、今子供さんと別居されて海外勤務されている人々に私は声を大にして申し上げたい、「どうか子供さんは一緒に海外へ連れて行ってあげて下さい、そして日本の教育を振り返ることなく現地校に入学させ、豊かな国際経験と国際感覚、海外の学校生活、その国及び国民生活の理解を深められる様にしてあげて下さい。この事が子供さんにとって良い経験となり、物事を見る心と目が一般旅行者としてではなく、その土地に住みついた様な感じで、本当のその国の良さを発見するのに役立ちます。海外勤務を終えて帰国されても、良い校風を持った幅広い心、ゆとりのある心の同志社国際高校が両手を広げて待ち受けて下さり何ら心配は無用です。

この様な学校が、今後もどしどし増え国際性豊かな学校作り、社会作りが広がって行く事を望む次第です。

(大同マルタ染工 働・仕上部長)

同志社国際高等学校への期待

楠見征男

海外勤務が不可避な貿易会社で海外駐在員になりたがらない社員が急増しております。貿易立国、国際協調が国策であるべきわが国の現状からすればまことに憂慮すべき事態といわなければなりません。

松下グループでは現在海外勤務者数八〇六名、帯同家族は約二〇〇〇名と多くの人々が海外で生活しております。

周知のように一九七四年の石油ショック以来、国際経済は大きく変革してきましたが、資源のないわが国の生きる道は貿易であり、海外事業であります。そして、激動の八〇年代は海外事業を益々積極化して行く必要があっても、これを縮小することは毫も考えられません。

こうした中であって、海外の人々が後顧の憂いなく潑刺として前向きの仕事に取り組んでいくために一番心配なのは子女教育問題であります。

「お父さん、僕はもう学校に行かんでもよいよ。どうせ、先生の

言うこと何もわからんだから」というのが現地のインターナショナルスクールに入学してから二、三日後、松下中堅社員の子供の登校を拒んだ言葉でした。

子供の教育は一体どうなるのでしょうか。

連れて行くと学力が後れて将来大きな悔いを残すのではないであろうかという不安感。そして帰国後、果して日本の教育に適応できるかどうかの不安感は非常に大きく、最近では一般的に言って働き盛りの課長クラスを中心に海外勤務を敬遠する風潮が出てきております。

前述の如く、当社でも海外に子女を同伴することを逡巡したり、あるいは海外に在住していても中学校の中途で子女を単身で帰国させなければならぬケースは相次いでおります。また、海外での教育がつねに日本国内の教育により影響をうけ、受験中心の不自然なものになっているのは結局は高校入試対策というきびしい現実的な問題があるからだと思います。

これから一〇年二〇年先の日本の姿を考えてみる時、現在の日本の教育制度は、果してこれだといふのかという疑問を感じざるを得ません。

今やわが国経済の海外進出は、それなりに大きく成功を収め、日本の動きが世界経済の中で非常に注視されるようになってきております。国際協調の主役を演じる時代が来たと明確に認識すべきでありましょう。それだけに海外での事業活動は更に進展して行くものと予想されます。事業活動には、人・物・金が必要なのはご承知のとおりですが、この中で最も重要なのは人であり、人づくりだと思います。適材適所配置が人事ローテーションの鉄則ですが、それだけに海外勤務というのは、もはや特別視する時代ではなく、国内転勤と同じ感じで受けとめられるメンタリティと、生活・教育環境づくりが必要になってきております。

会社が社員の家庭生活、子女の教育面で、社員の犠牲を強いることなく、言いかえると子供が犠牲になるか親が犠牲になるかの二者択一を迫ることなく海外勤務が命じられ、かつ必要な年数だけ勤務が続けられるよう、現状を改善していく必要があります。海外勤務者とその子女の犠牲を軽減するために、国が、企業が、どのような手を差し延べてきたか。この答えは決して満足すべきものではなかったらうと思えます。

このたびの、同志社国際高校設立の快挙は、少なくとも海外勤務者とその家族にとって、ひいては企業サイドにとって大きな福音となつたのは事実であります。

海外子女教育全般への取り組みは、長い間海外勤務者自身と派遣

先の企業による自己解決に頼っておりましたが、ようやく政府が前向きの姿勢をみせはじめたのは、六年前の中央教育審議会の答申でした。これは海外子女教育について、海外の日本人学校の経営とともに、帰国子女を受け入れる学校に關しての提案がなされております。

文部省では、この提案に則り、昭和五二年度から、いわゆる帰国子女受け入れ専門高校設立に援助を開始し海外子女対策の比較の後れていた関西地区でも、上野総長はじめ、同志社の関係諸先生方の並々ならぬ熱意とご尽力により、ようやくこの四月に同志社国際高校は開校されました。そして松下グループでは、現在六名の子がお世話になり、勉学に勤しんでおります。私共、直接海外子女に係っている者にとって誠に同慶の至りであります。

中教審の答申では、「帰国子女教育は、単に帰国子女に対して一般の教育に順応させることを目的とする、いわゆる適応教育に止らず、子女が海外で得た経験や能力を、本人及び学校全体のために活用できるような教育を進めるべきである。」と述べられているように、私共保護者の立場、企業サイドから同志社国際高校の教育に対して望みたいことは、決して帰国子女に対する救済的な教育だけであってはいけないことでもあります。すなわち、マイナス面を取り除くという課題の上に、帰国子女の持ち帰った良さを助長する教育、海外体験というプラス面を伸ばしてやるということがより重要な課題ではなからうかと考えます。そして国内子女とあわせて立派な新しい同志社人、真の国際人を育て、世に送り出していただきたいと期待しております。それが本人を生かし、ひいては新島襄

先生の建学精神に合致するものだと言信しております。

海外子女教育について最近政府の関心が強くなってきていると感じられますが、帰国子女受け入れ専門高校の相次ぐ設立も、その一つの証左だと思います。しかし現在でも受益者負担の原則は根本的には改善されておらず、私共企業サイドとしては、海外勤務者に子女教育面で余計な経済的な負担をかけさせない、という配慮は依然として必要であります。つまり、通常の国内子女の教育と比較して、多くの費用が掛りすぎることです。

また、私共企業を中心とした一般社会のメンバーには、海外子女の特性をできるだけ生かしてあげようとする決意と行動が求められていると思います。

海外で教育を受けた子女に対し、わが国の社会が正しく評価し、その能力・適性がほんとうに生かされる社会活動の場を準備する、その一つのステップとして海外校の卒業生、国際高校の卒業生を積極的に採用、登用することを企業として今ここで真剣に検討しなければならぬと痛感している次第です。

(松下電器貿易株式会社人事部海外人事課長)

Life and Letters of Joseph

Hardy Neesima 復刻 YUN

新島襄先生の恩人アルフイーアス・ハーディー氏の三男の編になるこの書は、先生の自叙伝、日記、ハーディー夫妻宛の手紙を中心に伝記風にまとめられたもので、一八九一年ボストンで出版された。その後ほとんどの先生に関する伝記はこの書を原本として書かれている。今まで各方面から復刻が望まれていたが、さる一月二十三日の先生没後九十周年を記念して同志社大学出版部より復刻された。

この書の英文は読み易く、なによりも第一級の資料が豊富である。先生の生い立ち、密航の理由、アメリカでの九年間の学生生活、田中不二麿との米欧教育視察、同志社英学校の設定、大学設立運動、キリスト教の伝道、二回目の欧米旅行、など先生の思想と行動を主に先生自身に語らしめた伝記で、キリスト教史的にも貴重な書物である。

復刻は初版本をほぼ正確に再現している。新島研究等に活用していただければ幸いである。A5版、三五〇ページ、上製本一五〇〇円、並製本五〇〇円、同志社本部収益事業課扱い。